

楽書とは、こんにちでいうところの雅楽に関する文献をいう。しかし、その内容は雅楽のことにのみにとどまらない。文学や歴史に関わる資料を豊富に含むものも存する。ゆえに楽書の研究は音楽のみならず、文学・歴史その他の分野の研究にも資するものである。

筆者は、楽書の研究をとおして、諸分野の研究に豊かな知見を得たいと考える。

本論は、その目的のために、中世成立の代表的楽書である『教訓抄』、『統教訓抄』、『春日楽書』の三書について考察した論稿をまとめるものである。いずれも、筆者が「雅楽に関する記録・文献の研究。主として『教訓抄』『統教訓抄』から音楽史を考究する」の題目で、日本学術振興会より科研費（特別研究員奨励費）の交付を受け、かつ二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」の、中世日本漢文班の研究活動と連動して着手したものであり、科研と同プログラムの終了後も引き続き行ってきたものである。

以下に示すとおり、本論には論考のほか、上のプログラムと連動して共同で行った翻刻・目録などを参考資料として別冊に収める。

目次

凡例

はじめに——この研究の背景について——

第 1 部 『教訓抄』『統教訓抄』の研究

第 1 章 『教訓抄』の古写本について

第 2 章 神田喜一郎旧蔵の『教訓抄』について

第 3 章 『統教訓抄』の混入記事について その一 ——日本古典全集底本の伝来と曼殊院本——

第 4 章 『統教訓抄』の混入記事について その二 ——曼殊院本と日本古典全集本の比較——

第 2 部 「春日楽書」の研究

第 1 章 春日大社蔵『舞楽古記』概論

第 2 章 『舞楽手記』諸本考

第 3 章 『舞楽手記』筆者・成立考 その一 付、春日大社蔵『楽所補任』の筆者について

第 4 章 『舞楽手記』筆者・成立考 その二 ——跋文二の解釈と、狛近真以後の荒序継承について——

初出一覧

おわりに——今後の課題と展望——

（別冊）参考資料

- 1、雅楽関係史料目録稿（上野学園日本音楽資料室蔵書目録）（神田編）
- 2、『教訓抄』編年年表（磯水絵・田中幸江・川野辺綾子・神田編）
- 3、宮内庁書陵部蔵『教訓抄』翻刻（一）自卷一至卷三（教訓抄研究会編）
- 4、宮内庁書陵部蔵『教訓抄』翻刻（二）自卷四至卷七（同上）
- 5、宮内庁書陵部蔵『教訓抄』翻刻（三）自卷八至卷十（同上）
- 6、曼殊院蔵『教訓抄』翻刻 卷二、卷三、卷七（同上）
- 7、井伊家旧蔵『教訓抄』卷第四（彦根城博物館所蔵）翻刻（岸川佳恵・神田編）
- 8、中御門家旧蔵『教訓抄』卷第十（内閣文庫蔵〔打物譜〕）翻刻（同上）
- 9、神田喜一郎旧蔵『教訓抄』卷第十（京都国立博物館所蔵）翻刻（同上）

10、春日大社蔵〔楽記〕翻刻（櫻井利佳・岸川佳恵・川野辺綾子・神田編）

11、春日大社蔵『舞楽古記』翻刻（同上）

12、春日大社蔵『舞楽手記』翻刻（岸川佳恵・神田編）

13、東儀鐵笛著『日本音楽史考』翻刻（二）

——第四期 鎌倉時代の音楽 七、楽舞の継承（第一）——（磯水絵研究室編）

初出一覧

第1部は、『教訓抄』『続教訓抄』を取り上げる。『教訓抄』は、^{こまのちかまね}狛近真が天福元年（1233）に編纂した楽書であるが、雅楽について総合的、網羅的に記述したものとされる現存最古のものであり、その点で貴重であるとされる。しかし、従来この書の古写本については、存在が指摘されながら、多くが未検討であった。第一章『『教訓抄』の古写本について』は、現在確認できる古写本五本について、初めて原本の網羅的調査を行い（うち、一本は写真紙焼きによる）、各本の書誌・解題を記して、その共通する特徴を考察する。とくに2006年初公開の宮内庁書陵部本を検討するほか、内閣文庫所蔵の「^{うちものず}打物譜」（同文庫指定名称）が『教訓抄』巻十の残巻であることを指摘する。なお、これら五本の古写本は共同で翻刻を行った（参考資料3～9）。

続く第2章は、最古の写本とされる京都国立博物館所蔵の神田喜一郎旧蔵本（巻十零本、鎌倉後期写）について検討する。神田本は、国の重要文化財に指定され、日本思想大系『古代中世芸術論』（岩波書店）に翻刻されているものであるが、これまで原本の書誌は公表されておらず、内容の研究もなかった。2009年に行った原本の独自調査に基づき、これまで明らかでなかった紙背裏書を検討し、また近世の写本との比較を行って、同本の資料的価値について考察する。また、内閣文庫所蔵の「打物譜」（前述）がこれに接続するものであることを初めて指摘する。

続く第3・4章は、『教訓抄』の著者近真の孫朝葛^{ともかづ}が編纂した楽書『続教訓抄』（鎌倉後期成立、残巻のみ伝存）を扱う。同書は『教訓抄』の影響下に成立したものであるが、『教訓抄』にない記述を多く含み、かつ説話文学をはじめとする中世の文学に関わる記事を含む点で貴重である。しかし、この書には従来、辞書・解題等において、他書からの混入記事が指摘されている。ここでは、その混入記事の問題について、現存最古の写本である曼殊院本を含めて検討する。

第2部は、奈良県春日大社に所蔵することから「春日楽書」と通称される楽書群（現存七巻）を扱う。いずれも鎌倉～南北朝期に成立したと見られる、それぞれ内容の異なる楽書であり、国の重要文化財に指定されている。そのうち、ここに取り上げる『舞楽古記』は、舞楽^{りょうおうこうじよ}「^{りょうおうこうじよ}陵王荒序」演奏の部類記であり、『舞楽手記』は同じ「^{りょうおうこうじよ}陵王」の舞譜であるが、どちらも近真没後の「荒序」相伝の行方を窺う資料として貴重である。いずれも、従来未解明であった筆者・成立・諸本・内容等について考察し、また「春日楽書」（七巻）が狛近真の三男真葛^{まねかづ}の子孫真村^{まねむら}によって春日社に奉納された楽書群であったことを初めて指摘する。なお、この「春日楽書」については現在も翻刻作業を続けており、これまでに『楽記』『舞楽古記』『舞楽手記』の三書を行っている（参考資料10～12）。また、楽書の所在調査の一環として、上野学園日本音楽資料室（当時。現在は上野学園大学日本音楽史研究所）所蔵の雅楽関係史料の目録を作成した（参考資料1）ほか、狛近真の周辺について言及している東儀鐵笛著『日本音楽史考』の翻刻（一部）を行っている（参考資料13）。